

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2006－2009

課題番号：18592355

研究課題名（和文） 脳卒中予防医療における無症候性脳血管障害患者の看護ケアシステムの開発に関する研究

研究課題名（英文） Development of nursing practical care system for the clients who asymptomatic of cerebrovascular disease in preventive medical care.

研究代表者

山本 直美 (YAMAMOTO NAOMI)

神戸大学・大学院保健学研究科・講師

研究者番号:70305704

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：慢性病看護学・外来看護

1. 研究計画の概要

本研究は、脳卒中予防医療の観点から、脳ドック診療（外来）を中心とした看護実践活動の実態の把握を目的とし、期待される看護実践活動の検討である。そのため、以下のような視点から研究をすすめる。

- (1) 脳ドック診療に関わる看護実践活動の現状を把握するために、全国の脳ドック診療開設期間の看護部長を通じて郵送法による質問紙調査を実施する。
- (2) 脳ドック診療に日々従事している看護師の実践における困難や、意義、脳卒中予防に対する考えなど、現実的な実態を把握するための聞き取り調査を実施する。

以上の研究方法をとおして得られたデータを各方法論に基づいて解析し、さらに統合的解釈を加える。さらに、今後、脳卒中予防医療において望ましい看護実践に有効な看護システムや具体的な看護活動プログラムを思案していく。

2. 研究の進捗状況

現在までの状況は、上記研究方法の 1) に関してはすでに調査は終了している。統計的解析と記述データの内容分析は終了している。その結果は以下の通りである。

調査用紙は対象となる施設看護部長 501 名に配布。115 名から回収、有効回答は 112 名

(回収率 23%、有効回答率 97%) であった。1) 開設形態：単独が 5%、健診部門との併設が 51%、外来部門との併設が 37%。2) 看護体制：看護師を「配置している」が 71%、うち「専属」が 4%、「配置していない」が 25%、「看護職以外の配置」は 51%であった。配置していない理由：＜人員不足＞＜健診者数が少ない＞＜必要性の否定＞。3) 看護ケアの現状（看護師を配置している施設）：＜安全安心でスムーズな健診の保障：説明、誘導、手続き＞＜問診：情報確認、生活指導＞＜診療補助：計測、検査、診察＞。4) 今後の活動展望：看護師の配置や関わり方は、＜専属配置の奨励＞と＜看護職によるプライマリーケアの充実＞など専門性を発揮し、個別的、主体的、積極的な関わりの必要性が示された。活動内容は＜健診後の継続的保健指導＞＜無症候性患者の心と身体のケア＞＜脳卒中予防対策の啓蒙活動と健康相談＞＜医療者間連携強化の調整＞であった。

脳ドック診療で勤務する看護師は、他の診療補助業務が兼務となることが多く、一般的健診業務との相違を明確にしにくい。また、脳ドック診療における看護の必要性に関しても看護師による認識にばらつきがある。しかし、今後の展望には、無症候性患者への看護ケアの必要性も含め、健診結果によって生じる看護へのニーズに関心が示された。

研究方法 2) に関しては研究参加者 10 名の聞き取り（継続聞き取り 3 名）が終了している。現在分析中であり、実践活動の具体的な構造化を目指している。

本研究は2つの方法論を統合し、脳卒中予防医療における看護活動の実態に迫ると共に、求められる看護活動の役割と責任を明らかにし、真に国民の健康生活の豊かさに繋がる看護実践活動を試案する方向で取り組む。

Nursing Research Conference in Dundee, Scotland, 2007, 1st and 2nd May.

3. 現在までの達成度

<②おおむね順調に進展している。>

理由：

予定していた研究方法の内容にそってすすめている。しかし、当初の予測よりもサンプルが少なく、結果の妥当性・信頼性に関しては若干の不安を残している。

また、看護師への聞き取りに関しては、20年度からの特定健診・特定保健指導の導入において各施設が健診システムの見直しをはかるなど、脳ドック診療の位置づけが変化する過渡期でもあった。そのような環境的要因も加わり、研究への参加者の獲得に困難があった。

4. 今後の研究の推進方策

今後は、聞き取りデータの分析をすすめ、全国調査結果を統合し、再度詳細な分析をすすめる。その際には、先行研究の予防的保健行動としての脳ドック診療に関わった受診者の実態調査とも統合することで、看護実践活動の必要性はより明確になると考える。その上で、本研究の目的とする脳卒中予防医療における看護実践活動のシステムあるいはプログラムをめざす。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 2件)

- 1) 山本直美 (神戸大学 大学院保健学研究科), 澁谷幸, 登喜和江, 石川雄一: 脳ドック診療における看護活動の現状と今後の展望, 日本看護科学学会学術集会, 2008. 12. 14, 福岡.
- 2) Naomi Yamamoto, Yuichi Ishikawa, Noriko Tsuda, Mamiko Yada, Masako Kanagawa, Hideyuki Ohnishi, Youji Takimoto, Miyuki Shibutani, Kazue Toki, Katsuhiko Sawada; Japanese Brain Dock institution for detection of asymptomatic of cerebrovascular disease. The questionnaire survey, International